

教材名「誠実な人―吉田松陰―」（光文書院 6年 p.72 内容項目：主として自分自身に関すること「正直・誠実」）

1. 本教材について

- ▼本教材は、幕末の尊皇攘夷の思想家として知られる吉田松陰を学ぶ偉人伝である。アメリカへの密航を企て失敗したが、「自分のしたことをごまかしたくない」と自ら名乗り出た松陰の「誠実さ」を強調し、“英雄”として情緒的に印象づける。しかし、このときの経過を松陰自身が後に記録した『回顧録』（奈良本辰也著『吉田松陰著作選』講談社学術文庫、p.284）によると、「計画に失敗し、狼狽（ろうばい）のあまり柿崎村の名主の家に自首して出た。ことの次第を述べ、善処を申し出た」とあるだけで、教科書に書いてあるような事実はまったく記されていない。光文書院にこの教材の典拠となったものは何かと問い合わせたが、古い教材なのでもうわからないとのことで、創作の可能性が高い。なお、典拠を探しても見つからない場合は、すみやかに削除し、他と差し替えるべき教材と思われる。また教科書には、松陰が老中・間部詮勝（まなべあきかつ）の暗殺を企てて処刑されたことや、アジア侵略を積極的に主張していた人物であったことにはまったく触れていない。
- ▼松陰は「安政の大獄」に連座して逮捕されたとき、老中・間部詮勝の暗殺を企てていたことを自ら告白し、そのことによって処刑された。「自分のしたことをごまかしたくない」ことを「誠実さ」の証しととらえるなら、これも「誠実さ」の証しになるのかもしれないが、松陰が間部暗殺計画を告白したのはすでにばれていると思ひこみ、それなら自らの正当性を積極的に主張した方が得だと判断したからにはほかならない。単なる正直さからではなく、幕府側との政治的駆け引き（打算）でもあったのである。また、ばれてなかったとわかった時点では、「暗殺ではなく、言葉で諫（いさ）めようとした」と、言い換えて罪を軽くしようとごまかしてもいるので、松陰を「誠実な人」として子どもたちの人格的なお手本にさせようとするのは、とうてい無理がある。 [資料1参照]
- ▼松陰を長州藩の尊皇攘夷運動に大きな影響を与えた人物として、歴史学習で教えるならともかく、子どもたちが見習うべき生き方のお手本として美化し、道徳の教科書で取り上げるのは不適切である。しかし、現に道徳教科書で取り上げられているので、教科書には書かれていない松陰の主張を紹介し、松陰の別の一面、松陰が果たした歴史的役割も考えさせたい。 [資料2参照]
- ▼松陰の一連の行動は幕末の激動期において、日本をヨーロッパ列強に負けない強国にしたいという情熱から出ていたといえる。しかしそれはヨーロッパ列強をまねて、周辺諸国を乗っ取る（植民地にする）ことを通じて成し遂げようとしたものであった。他国およびその国民を犠牲にすることをいとわない人物を、果たして道徳的に「誠実な人」といえるだろうか。松陰の弟子たちが後に日清戦争や日露戦争を主導したことを伝え、この教材から松陰を「誠実な人」と美化することだけを学ぶことのないようにしたい。

2. 本教材を扱う際に、特に注意すべきだと考えたこと

- ▼実在の人物を「偉人」として、道徳の見本として教えることはむずかしい。なぜなら人間は長所もあれば短所もあり、様々な側面を持つからである。また立派な行いと見られることも、別の立場から見ればそうとは言えないということもある。実在の人物は漫画のスーパーヒーローとは違うことを伝えたい。

▼この教材は歴史上の人物を扱っているので、歴史学習の後で取り上げるのが良い。しかし、この教材は道徳教材としてそもそも不適切であるし、根拠もないことが明白となれば、授業では扱わないことも考えられる。

3. 指導過程

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導入	○吉田松陰という名を知っているか、どんな人かをたずねる。	○坂本龍馬や西郷隆盛のような有名人ではなく、知らない子どもが多いと考えられるが、知っている子どもにはどんな人物像が定着しているのかを把握する。
展開	<p>○本文を読み、どんなことが書かれているか、ポイントを押さえる。</p> <p><ポイント></p> <ul style="list-style-type: none"> ・時代は江戸時代の終わりごろ。 ・アメリカのペリーの黒船が来ていた（2回目）。 ・当時、海外渡航は禁止されており、破れば死罪だった。 ・しかし、松陰は日本が実力のある国になるために、アメリカの進んだ文化を学ぼうと密航を企てた。 ・ペリーに断られ密航は失敗した。 ・<u>弟子は自殺することを主張したが、松陰は幕府に自首した。理由は助けてくれた人に迷惑をかけないため。</u> ・<u>役人は松陰のいさぎよさに感動し、松陰を尊敬した。</u> ・松陰が教えた松下村塾からは明治維新で大活躍した人物がたくさん出た。 ・自分の信じたことを行い、<u>決して人をごまかさなかつた松陰の心は弟子たちにしっかり受け継がれた。</u> <p>○人格的側面とは別に、松陰には独自の思想があったことに触れる（『幽囚録』の現代語訳をわかりやすく伝える）。</p>	<p>○本文を区切りつつ、子どもに発表させ、ポイントをまとめる。</p> <p>○本文では、松陰は正直で誠実な人物であったことが強調されているが、下線部は松陰自身の『回顧録』にはみえず、教科書会社が創作した可能性がある。したがって松陰の「正直さ・誠実さ」を強調せず、なぜ自首して出たかについては、松陰は「あわてたので」としか書いていないと補足する。</p> <p>また松陰は『留魂録』で書いているように、間部暗殺の企てについて前言を翻し、ごまかしてもいるので、「<u>決して人をごまかさなかつた</u>」とは言えないと補足する。</p> <p>○「弟子」とはだれかを聞いてもよい。歴史で伊藤博文は習っている。</p> <p>○松陰の主張をイメージしやすくするため、『幽囚録』に出</p>

	<p>○日本を立派な強国にするために、他国やその国民を武力で手に入れ支配することについてどう思うかと投げかけ、話し合わせる。</p> <p>○松陰は討幕のために老中・間部詮勝の暗殺を企て、処刑されたことを伝える（安政の大獄）。</p>	<p>てくる地域がわかるアジアの地図を示す。</p> <p>○「誠実な人」という題名との関係で考えさせるとよい。</p> <p>○歴史の授業ではないので、ここを詳しく掘り下げることはしない。</p> <p>○この教材ではアクティブラーニングは難しいので、無理にしなくてもよい。</p>
ま と め	<p>○松陰の思想は弟子たちにしっかり受け継がれ、その後の日本の対外政策（歴史で習った韓国併合など）に大きな影響を与えたことを伝える。</p>	<p>○詳しくは中学校の歴史で学習すると興味をつなぐ。</p> <p>○歴史上の人物には様々な側面があるので、その人物について書かれたいろいろな偉人伝を読み、多面的な見方を身につけてほしいと伝える。</p>

4. 参考資料

【資料1】

吉田松陰『留魂録』（現代語訳）

「7月9日、ひととおりの大原公のこと（尊皇攘夷派の公家・大原重徳をかついで長州から蜂起しようと計画したこと）、鯖江侯（鯖江藩主）間部詮勝要撃（襲撃すること）のことなどを申し立てたのである。初めに思ったことは、これらのことはすべて幕府側でも探り出して知っているにちがいないから、隠しだてなどしないで明白に申し立てた方がかえってよろしいであろうということだった。そこで、いちいちそのことについて述べたところ、幕府の方では全く知らないことのようにであった。そこで考えなおして、幕府で知らない所を強いて申し立て、多人数に問題を広げて連累者を出すということになれば、これは善類（良い人）を傷つけることも少なくないであろう、『毛を吹いて傷を求むるに齊し』（毛を吹いて傷をつけるようなもの）とはこのことだと自重することにした。そこで鯖江侯要撃のことも要諫（ようかん・言葉で諫めること）というふうにいいかえておいたのだった。」

（奈良本辰也著『吉田松陰著作選』講談社学術文庫 p. 58）

* 『留魂録』は吉田松陰が門弟たちにあてた遺書である。そのなかで自分が処刑されるに至った顛末についても触れている。松陰は1858年の日米修好通商条約締結を進めた大老・井伊直弼のもとで、実務を担った老中・間部詮勝の暗殺を計画した。そのために必要な武器を調達してほしいと長州藩に願い出たが、長州藩は拒否し松陰を牢獄に入れた。そのころ松陰は幕府からも危険人物としてにらまれており、幕府から呼び出しを受けたため、長州藩は松陰を江戸に護送した。

この呼び出しを松陰は間部詮勝の暗殺計画が幕府にばれたためだと思いこみ、積極的に自供し自らの行動の正しさを証明しようとしたのだが、幕府は暗殺計画を知らず、松陰の思惑は裏目に出たのであった。ばれていないとわかった時点で、松陰は暗殺ではなく言葉で諫めようとしたと言い換えたが、あとの祭りであり、結局松陰は処刑された。

【資料2】

吉田松陰著『幽囚録』（現代語訳）

「まず軍備拡張を急ぎ、軍艦や大砲がほぼ充足できたら、まず北海道に植民して諸大名にそこを守らせ、次いで隙を突いてカムチャッカ半島やオホーツク（シベリア東部）を占領し、一方、南の琉球王には国内の大名と同等の地位を与え、次に朝鮮に対しては古代と同様に日本に服属して朝貢をさせ、さらに満州を割き取り、南は台湾やフィリピンの島々を手中にして進取の勢いを示し、しかる後に人民を愛し、兵士を育て、国境を守るならば、国は立派に立ってゆくだろう」

（梅田正己著『日本ナショナリズムの歴史II』高文研 p.42）

* 『幽囚録』は吉田松陰が密航に失敗した後、獄中で日本の対外政策について記したものである。これを見てもわかるように、吉田松陰は、早くからアジア諸国を植民地にすべきと主張していた。北はカムチャッカから南はフィリピンまで視野も広く、植民地にできそうな国・地域を見定めていた。松陰の影響を受けた伊藤博文や山形有朋らは明治維新以降、これらの国々・地域を領有するために、日清戦争・日露戦争をしかけ、日本のアジア侵略のレールを敷いたのである。